アンビバレンスと慈円圏の藤原定家

尾崎　勇

アンビバレンスということ――問題の所在――

慈円は久寿二年（一一五八）四月十五日、摂関家の藤原兼家より七代目の嫡孫であった忠通を父として生を享けた。翌年七月には保元の乱が勃発して「武者ノ世」へ突入していく。嘉応二年（一一七〇）七月三日には慈円の兄基房と平清盛の孫である資盛との軋轢（あつれき）から紛争が勃発して治世が動揺していく。覚一本『平家物語』等の諸本の章段「殿下乗合」を発端にしながら慈円圏では「頼朝の物語」を内実として源平争乱の顛末を描いていくのが『治承物語』なのである（以下、『治承物語』を「物語」と略称）。物語を遺存している屋代本『平家物語』（以下、本稿で用いる「物語」の引用本文は屋代本を指す）では治承四年（一一八〇）六月三十日、清盛は福原遷都を強行し、徳大寺実定は寂れた妹の多子のいる邸で、

……旧都ノ荒行ヲ、今様ニコソウタハレケレ。
　旧キ都ヲ来テミレハ浅芽カ原トソ荒ニケル
　月ノ光ハクマナクテ秋風ノミソ身ニハシム
ト、推返ク二三反ウタヒスマサレタリケレハ、……

（巻五・「徳大寺左大将実定卿旧都近衛河原皇大后宮大宮御所被参事」）

とあるように、今様をうたった。この場面展開は元暦二年（一一八五）三月「廿四日卯刻、源平時ヲ作ル。其声、

上ハ梵天マテモ聞ヘ、……」（巻十一「長門国壇浦合戦事」）として源氏軍が歓呼の声へと収斂させた。荒廃してしまっている京での今様の響きには、アンビバレントな修辞が介在している。[1] 治承四年八月の頼朝の旗揚げを発端としてより正面に戦闘そのものを『愚管抄』も押し出し始める。『愚管抄』別帖の高倉天皇の治世より、後鳥羽天皇の条での兼実が摂政に就いて頼朝と連携していったことを、

九条右大臣ハ、文治二年三月十二日、ニツイニ摂政詔、氏長者ト仰セ下サレニケリ。（中略）又頼朝関東ヨリヤウ〳〵ニメデタク申ヤクソクシテ、世ノヒシトヲチヒヌト世間ノ人モ思テスギケリ。（巻六――二七三ページ）

として、傍線部のように治世が静謐になったと批評している。この道理史観の雛形は、西山で企画・創出させている「頼朝の物語」の『治承物語』にあったわけである。

現存する藤原定家の日録である『明月記』は、十九歳の治承四年（一一八〇）二月から嘉禎元年（一二三五）十二月、七十四歳までの五十六年間にわたっており、頼朝が旗揚げをした治承四年八月から物語の元暦二年（一一八五）の「同三月廿日卯刻、長門壇ノ浦赤間関ニテ、源平矢合トソ定ケル。」と描いた十五年の時空は完全に包摂されている。高倉天皇の譲位そして安徳天皇の即位の翌年である養和元年（一一八一、治承五年七月十四日に改元。）十二月十九日の条で、

十九日。天晴る。入道殿、新御所に参ぜしめ給ふ。見参数刻と云々。

とあって、父の俊成が後白河院御所に参上したことを弁えていた。その後は文治四年（一一八八）四月二十二日、同月二十四日、同年九月二十九日にも、その俊成の事を記載したのは二十八歳であるから廟堂の内情も熟知していた。

物語の描いている治承四年九月の富士川合戦以降、源氏勢の動向や平家一門都落ちをはじめとして頼朝が派遣した大軍と宇治川をはさんで先陣争いまでの顛末は『明月記』では分明できず、平家一門の栄耀栄華と専横のことだけが記載されている。

『明月記』治承四年九月に、定家は、

世上乱逆追討耳に満つと雖も、之を注せず。紅旗征戎吾が事にあらず。陳勝・呉広、大沢より起り、公子扶蘇項燕と称するのみ。最勝親王の命と称し、郡県に徇(あまね)しと云々。或は国司に任ずるの由、説々憑(たの)むべからず。右近少将維盛朝臣、追討使となり、東国に下向すべきの由、其の聞えあり。

との言説を刻んでいる。これをめぐって辻彦三郎は、当時十九歳の定家の筆ではなくて「新院御祈としての法勝寺における千僧御読経は、玉葉・山槐記の示す如く治承四年八月二十四日に行われたことは明白であって、定家はそのことを記入すべく、改めてうしろの「九月」の前に意識して書加えた。（中略）定家は「不能右筆」と「世上乱逆」云々との行間を利用し「八月」の二字を書入れることにより、一応窮地を脱することにしたのであって、（中略）上述の行間は定家にとって「八月」の二字を書入れるべく恰好であった。」と指摘した。さらには「執筆年次は寛喜二年（一二三〇）前後から定家が宿望の権中納言を拝任する貞永元年（一二三二）正月ごろまでと推定できるのであり、かつその時期は定家の七十歳前後に相当し、筆蹟上からも支障がない。」と論じた。[2] が、従来どおりに十九歳の定家が記したとの見解も依然として有力なのである。[3] だが、やはり傍点を付した辻の「行間」の言辞は歌人としての定家の修辞を顧慮していくうえで看過できないと思われる。

『明月記』寛喜二年（一二三〇）七月十六日の条で、

予初めて故入道殿（文治二年）に参ずるの時、進むべきは。先考相具し参じ給ふ。御前に召すの後、奉公已に三四代、雑役匹夫の如し。

と刻んだ。傍線部の定家の意図を、以下のような定家の思念によっていよう。そもそも「名簿」を進めるのは臣従の証であったが、定家の場合は、九条兼実の摂政拝賀の儀に父の俊成と同伴して前駆を勤めた。それで「見参」すなわち「現参」（本人が直接出向いて面謁）が成立し、兼実の家司となり、以降には九条家との関係を回顧している。「御堂関白」と称される藤原摂関家の隆盛期を築いた藤原道長の子の長家が、御子左家の祖であった。その四代目が定家なのである。嫡流に違いないが、執政の「臣」の道長の子である頼通等の直系に奉仕してきており、出自の家を卑下しているのであった。さらに当時、藤原摂関家の直系である兼実は、『玉葉』文治元年（一一八五）

十一月二十五日の条に、

伝へ聞く、御前の試みの夜、少将雅行、侍従定家と闘諍の事あり、雅行定家を嘲哢の間、頗る濫吹に及ぶ。仍つて定家忿怒に堪へず、脂燭を以て雅行を打ち了んぬ（或は云はく、面を打つと云々）。この事に依り因って定家除籍し畢んぬと云々。

とあって、年中行事である五節舞姫の御前試みの夜に源雅行と定家は乱闘した。そのために定家は除籍されてしまった。そこで父の俊成は、後白河院の側近の藤原定長に申文を送って、還昇を懇願して許されている。[4]『玉葉』の「闘諍の事」・「頗る濫吹に及ぶ」は、定家が争乱をテーマとしている『治承物語』の創出に参画することを窺っていくうえで興味深い言辞となっていよう。

定家が二十歳の終わりから三十歳最初の文治五年（一一八九）頃から翌年に創作したとされる「いくさ物語」の側面も具有する『松浦宮物語』があった。四十九歳より六十歳の間に西山で「頼朝の物語」を内実とする『治承物語』が創出され、その物語を取り込んで慈円は『愚管抄』を叙述していく。慈円の甥である九条良経の子息の道家が八十七代仲恭天皇の摂政に承久三年（一二二一）四月に就いたのを末代の道理と揚言したわけである。既述したように『明月記』治承四年九月の条の「世上乱逆追討耳に満つと雖も、之を注せず。」の言辞は、その十年後の寛喜二年（一二三〇）頃の辻説の加筆は看過できない。『明月記』寛喜三年（一二三一）二月十日の条には、西園寺公経の求めで、

源氏物語の歌書きだし、先づ覧せ奉る。

とあり、同年八月七日の条には、

伊勢物語を書き了んぬ。その字、鬼の如し。

同月十八日の条には、

日来時々書き出し大和物語、今日功を終へ了んぬ。（中略）平生書く所の物、落字なきを以て悪筆の一得となす。養老の心、数行を脱落し、之を書き入る。心中恥となす。

とあるように、古典籍の書写に懸命になっている。「文」の側に入れ込んでいる。殊に二重傍線部の言辞は刮目すべき事実であって、前掲した辻説の「行間に補書された」との言辞と併せて顧慮せねばなるまい。この両日の条から、治承四年（一一八〇）八月の頼朝の旗揚げ以降の養和・寿永・元暦二年（一一八五）四月の海戦で平家軍に勝利した後の承久の乱を見届けた七十歳の晩成した定家が、傍線で老いた自己をいたわりながら、十九歳の己（おの）が日録を読み返したならば、多くの想念が去来していよう。加筆した当時の『明月記』寛喜二年七月六日の条に、九条道家から勅撰集編纂を諮問されて、

去る比卿から天気を伺ふに、頗る以て欣然たり。（中略）進退谷まるべき事か。前代の御製尤も以て殊勝、之を撰ばば集の面に充満すべし。事の体機間、然るべけんや。聖代の御製、員数多くば、当時の所見忌諱の疑ひ有り。其の数を略せば、定めて又世間の謗り有るか。

と記しており、身に余る光栄に感謝しつつも、武力衝突の承久の乱で配流された後鳥羽院等の面影も同時に想起している。『新勅撰和歌集』が鎌倉幕府に対する政治的配慮から、後鳥羽・順徳両院や承久の乱に関与した人々の歌を百首程、定家は除棄する。下命された寛喜二年（一二三〇）七月六日から文暦二年（一二三五）三月十二日に、承久の乱の本質である「武」と対照的な勅撰集編纂の浄書すなわち「文」の営為を完遂させていくには、定家の心境にアンビバレンスがあった。この寛喜二年（一二三〇）七月六日当時に、半世紀以前の治承四年七月十四日に生誕した後鳥羽院の事象から院が下命した『新古今和歌集』の撰者になったこと、元久二年（一二〇五）三月二十六日の終功の竟宴や改定の切り継ぎなされていった承元四年（一二一〇）九月頃のこと、さらには同年の承元四年あたりから建保六年（一二一八）頃までの慈円圏に参画していったことを追懐していく契機にもなっていくであろう。物語化された治承四年（一一八〇）八月十七日の頼朝が石橋山に雄叫びの時局から承久の乱をも見据えながら、七十歳頃の定家は「世上乱逆追討耳に満つと雖も、之を注せず。」との言辞を、『明月記』治承四年九月に「補書」した。すなわち定家は「加筆」したと推定できよう。

一　九条家の家司としての定家

定家が九条家に仕えはじめたのは文治二年（一一八六）の二十五歳からであった。[5] その時期の『明月記』は欠落している。前掲したように『愚管抄』別帖の後鳥羽天皇の条に、

九条右大臣ハ、文治二年三月十二日、ニツイニ摂政詔、氏長者ト仰セ下サレニケリ。（中略）又頼朝関東ヨリヤウ〳〵ニメデタク申ヤクソクシテ、世ノヒシトヲチヒヌト世間ノ人モ思テスギケリ。（巻六――二七三ページ）

として、九条兼実と東国の頼朝との関連に比重をかけた慈円は、廟堂の内情から叙述していく。同天皇の条で、建久元年（一一九〇）十一月七日に上洛した頼朝を、

返々マコトニ朝家ノタカラナリケル者カナ。（巻六――二七三ページ）

と絶讃したのであった。文治五年（一一八九）十一月十三日に念願の左近権少将に任じられていた定家も、

定家少将になりたりけるに、ことさら三日過てよろこび申べきよし
思ひける程に、雪の朝申つかわしたりける　　定家
三笠山ふみ見し日より待しかど今朝の雪さへまだ跡もなし　　（三九四二）
返し
君ならで跡をばつけじ三笠山はや雪かゝれしひの梢に

と詠じている。三九四二番歌では、お祝いの使いを待っていましたが、今朝の雪にさえまだ足跡はついていませんと詠じた。母は「早く四位になりますようにお祈りします」と和しており、定家は翌年の建久元年一月五日に従四位下に叙される。九条家が頼朝と連携している治世のもとで、九条家に仕えている定家に余得が及んでいたのだが、建久六年（一一九五）八月十三日、兼実の娘の任子が中宮になっていたものの任子から生誕したのは皇女であった。九条家と廟堂で拮抗している源通親は後鳥羽院の乳母の範子を妻とし、範子の連れ子である在子が同年十二月二日に皇子（八十四代土御門天皇）を生む。そのため建久七年（一一九六）十一月二十四日、中宮任子が内裏

から退出、翌二十五日には兼実の関白・氏の長者が停止され、二十六日には弟の慈円も天台座主を辞任する。九条家が後退してしまう。この政変そのものをめぐって先行研究をみていこう。頼朝が大姫入内を精力的に活動して、通親の側に協力的であった。[6] 政変の首謀者は通親であり、頼朝の同意を取り付けて、一方では大姫入内を目指す頼朝にとっては兼実の失脚と任子の退出はむしろ好都合であったともされている。[7] 果たしてそうであろうか、

当該の建久七年の政変をめぐる事象を『愚管抄』別帖の後鳥羽天皇の条に、

コノ頼朝ガムスメヲ内ヘマイラセンノ心フカク付テアルヲ、通親ノ大納言ト云人、コノ御メノトナリシ刑部卿三位ヲメニシテ子ドモ生セタルオヲコメオキタリシヲ、サラニワガムスメマイラセムト云文カヨハシケリ。明雲ガ弟子ノ梶井宮ト云人、木曽ガ時イケドリニセラレタリシ、ヲトナシク成テ内ヘ日々ニ参リナドシテ侍リシニ、又浄土寺ノ二位密通ノキコヘアリキ。コレラガ云アワセツヽ、法皇ウセヲハシマシケルトキ、ニハカニ大庄ヲハリマ・備前ナドニタテラレタルヲタヲサレニキ。成経・実教ナド云諸大夫ノ家、宰相中将ニナリタル、トヾメナンドセラレシ事ハ、皆頼朝ニ云アハセツヽ、カノマ引ニテコソアリト、誠ニモコレ善政ナリトヲモハレタレバ、カヤウノ事ヲ浄土寺ノ二位モトガメテ、梶井ノ宮ニササヤキツヽ、通親ヲモ云ヒスヽムルナリケリ。内ノ御氣色ヲウカガフニ、又イタフ事ウルハシクテ、善政くトノミ云テ、御遊ドモハヾカラシクヲボシメシケンヲモ見マイラセテ、コヽニテハ頼朝ガ氣色カウト申、関東ヘハ君ノ御氣色ワロク候ト云テ、ヲモテヲ何トナクシ成シテ、又一定ヲトハンヲリハ、両方ニ會尺ヲマウクル由ノ案ドモニテ、コレハサダマレル奇謀ノナラヒナレバ、カクシテ又仏神ノ加護モエアルマジキ時イタリニケレバ、同七年ノ十一月廿三日ニ、中宮ハ八条院ヘイデ給ヒニケリ。

（巻六――二八一～八二ページ）

とある。この文章を筆者は解釈して箇条書きにしてみれば、次のようになろう。すなわち、

①頼朝は娘の大姫を入内させる思いを抱いて、通親にその意向の文を送付。

②ところが、通親も後鳥羽天皇の乳母の範子を妻とし、あいだに子を隠しもっていた。

③明雲の弟子の梶井宮（承仁法親王）が成長し、廟堂に参上している間に栄子との密通の噂がたってくる。
④その後、通親・範子・梶井宮が互いに連絡をとり、後白河院の崩御後に急に播磨国・備前国に大きな荘園を新設しようとしたのを兼実は反対し、不首尾になる。
⑤成経・実教という諸大夫家出身の者が宰相中将になったのを兼実は、頼朝と相談して辞任させた。これは善政として行ったことであったことなのである。
⑥そのような処置を栄子が非難し、梶井宮に伝え、通親を説得した。
⑦兼実の施政方針は筋目が正しく、後鳥羽天皇に善政くと進言する。そこで天皇は御遊なども遠慮されていた。
⑧栄子等は天皇に対して頼朝の意向はかくくと伝え、頼朝には天皇の兼実に対する気持ちは悪化していると通告。
⑨表面的には何事もなかったように取り次いで、さらにはっきりと尋ねられた折には、両方にいいわけを準備していた。
⑩この陰謀の定石があって、冥衆に加護もありえず、建久七年十一月二十三日に中宮任子は内裏をでていった。

となるではあるまいか。『吾妻鏡』建久六年（一一九五）五月二十二日条にも、

廿二日　丙午　将軍家御参内。この次を以つて殿下（兼実）御対面。都鄙理世の事、御談話一にあらずと云々。

と見える。頼朝が執政の「臣」の兼実と対面して京と鎌倉の理世の事についてあれこれと話し合っており、この時期は廟堂と鎌倉幕府とが協調していた治世であった。頼朝が希望する政治的立場は確立しはじめていた。但し、鎌倉時代後期の幕府関係者によって編纂されたものであるから、当時そのままであったか否かを慎重に配意しておく必要もあろう。政治史研究の側からみていこう。河内祥輔は、

頼朝は、この上京に妻・頼家・長女の家族を伴っている。頼家は後継者として後鳥羽に御披露目された。そして、長女は後鳥羽の妻に納れようとの計画であった。この女子の入内計画ついては、幕府創業の路線から逸脱したとか、頼朝の貴族化であるというように、芳しくない評価をうけているようである。しかし、その

ような捉え方は、朝幕関係が何によって支えられるのか、という視点に欠けているといわざるをえないであろう。いま、後鳥羽との間の絆（きずな）をどのようにつくるか、ということが課題なのである。（中略）もし実現していたならば、おそらくは朝幕関係の安定化に資したのではあるまいか。

と政変を把捉している。[8] 筆者尾崎が傍線を付した一文は、既述した大姫入内に精力的な頼朝をめぐって元木泰雄は「清盛を超越し、公武を従属させた空前の権力が眼前に迫ったと思えたことであろう。」との見解を披瀝している。[9] 要するに、従来の天皇の乳母を妻にしている通親に気脈を通じることで頼朝は、関白兼実の失政を後鳥羽天皇に訴え、近衛基通に替えたとの説に異議を呈しており、殊に筆者尾崎が二重傍線を付した河内の言説は看過できないので、本稿の「四　頼朝の観音信仰と大姫入内」で詳細に言及したい。

建久七年の政変で九条家の家運は衰退へ向うものの、既述したように『明月記』では、建久七年七月二十一日の条に「三首歌あり。」とだけあって、廟堂の内情に全く及んでいない簡略この上ない記載であり、それ以降は欠落してしまっている。建久八年八月十六日の条に藤原資実との贈答歌を掲出するのみで、定家は、

立ち馴れし三世の雲井を今更に隔てて見つる霧原の駒　　（三七九一）

と詠じた。三代に亘って昇殿を許されてきた私だが遠く隔たったまま宮中の年中行事に奉仕していますとの歌に資実は、

時の間の隔て鳴くらむ立ち馴れし雲井に近き霧原の駒

と和した。ほんの短い間の隔てでしょう、桐原の駒は以前立ち馴れた雲居近くにいるので、あなたが昇殿されるのもまもなくです、と慰めている。同年十二月五日の条も「五十首和歌を詠まんと欲す。」とあって、自己の周辺を簡略に記載しているのみである。当該日録の日の条も、定家自身が残さなかったか、または後年に削除したとも推測されてくるであろう。だが、『明月記』建久九年（一一九八）一月十八日の条では、

十八日。天晴る。早旦、召しによりて参上す。女房を以て仰せらるる事等あり、一昨日、予申し入るる子細あり。官途の事は望を絶ち了んぬ。御給等又所望無し。但し、下臈の近衛司に至り、女院中宮御給に於て

は、人の見る所、耻しく思ひ給ふ旨の子細なり。申す所、尤も其の理あり。事の次では以て両方に申すべき由、仰せ事あり。又事の次でに仰せらるる旨等あり。又申し入れ了んぬ。申す旨等、殊に御感言の答へありと云々。超越に於ては、全く痛むべからず。所望に於ては、又其の縁無きに依り、更に申すばからず。但し解官無くば、本官の出仕全く懈怠あるべからず。人の超越、翌日即ち出現すべし。此の上は、申し入る旨無きに依り、解却さるるに於ては、又痛むべからざるの由なり。此の条、殊に御興言等あり。即ち退下す。

と記した、当日、兼実邸に参上して女房を介して、他人に官位を越されても全く苦痛でない、「御給」も所望しない、また「解官」さえなされないならば、目下勤めている本官への出仕を怠らない、と定家は申し入れた。翌年六月二十二日には九条良経は左大臣に任じられ、九条家の前途に光明が見出されてくる。

二　『治承物語』の特質

『明月記』治承四年（一一八〇）九月の条には、前掲した「世上乱逆追討耳に満つと雖も、之を注せず。紅旗征戎吾が事にあらず」に直結させて、

陳勝・呉広、大沢より起り、公子扶蘇項燕と称するのみ。最勝親王の命と称し、郡県に徇（あまね）しと云々。或は国司に任ずるの由、説々憑（たの）むべからず。

と続けた。末尾の「説々憑（たの）むべからず」は「（このような）様々な説は信用できない。」との意味である。ここには慈円圏で創出させていった物語そのものをも念頭に置いる定家の言説といえよう。本節（二）ではそのことを窺っていきたい。

『愚管抄』別帖の「武者ノ世」の同時代史で、遷都という王法の動揺と平重衡の率いる南都焼討ちという仏法への甚大な危害を叙述しているのが、安徳天皇の条であって、

又治承四年六月二日忽ニ都ウツリト云事行ヒテ、都ヲ福原ヘ移シテ行幸ナシテ、トカク云バカリナキ事ドモ

ニナリニケリ。乍レ去サテアルベキ事ナラネバ、又公卿僉議行ヒテ、十一月廿三日還都アリテ、スコシ人モ心ヲチイテ有ケルニ、猶十二月廿八日ニ遂ニ南都ヘヨセテ焼ハラヒテキ。ソノ大将軍ハ三位中将重衡ナリ。アサマシトモ事モオロカナリ。長方中納言ガ云ケルハ、「コハイカニト思ヒシニ、サラニ公卿僉議トテ有シニ、カヘリナント思フヨト推知シテシカバ、放レ詞、サテヨカルベキ由申テキ」トゾ云ケル。

サテカウ程ニ世ノ中ノ又ナリユク事ハ、三条宮寺ニ七八日オハシマシケル間、諸国七道ヘ宮ノ宣トテ武士ヲ催サル丶文ドモヲ、書チラカサレタリケルヲモテツキタリケルニ、伊豆国ニ義朝ガ子頼朝兵衛佐トテアリシハ、

（巻五——二五〇～五一ページ）

と叙述している。旗揚げしてより以降の時局を東国の空間に配意しながら、当天皇の条でさらに、

小松内府嫡子三位中将維盛ヲ大将ニシテ、追討ノ宣旨下シテ頼朝ウタントテ、治承四年九月廿一日下リシカバ、人見物シテ有シ程ニ、駿河ノ浮嶋ガ原ニテ合戦ニダニ及バデ、東国ノ武士グシタリケルモ、皆落テ敵ノ方ヘユキニケレバ、カヘノボリケルハ逃マドヒタル姿ニテ京ヘ入ニケリ。其後平相国入道ハ同五年閏二月五日、温病大事ニテ程ナク薨逝シヌ。ソノ後ニ法皇ニ国ノ政ノカヘリテ、内大臣宗盛ゾ家ヲツギテ沙汰シケル。

（巻五——二五三ページ）

と慈円は展開させたのであった。

物語では、巻五の最初の章段「福原遷都事付代々諸国所々都遷事」の冒頭で、

治承四年六月三日、太政入道此日比執シ思ヒ被レ通ツル福原、都還有ヘシトテヒシマキアヘリ。

としてより、「法皇福原遷幸事」・「徳大寺左大将実定卿旧都近衛河原皇太后宮大宮御所被参事」・「福原怪異事」の各章段へ続け、「伊豆国流人前右兵衛佐頼朝謀叛之由大庭三郎景親早馬京着事」の章段に及ばせ、本章段の冒頭で、

同九月二日、相模国住人大庭三郎景親、福原ヘ立二早馬ヲ一申様、「伊豆国流人前右兵謀る頼朝、……

と描く。当該章段で頼朝を押し出し、その次に「燕大子丹謀叛事付感陽宮事」の章段では異国の故事である丹が

秦の始皇帝に囚われ、奇跡によって帰国できたが、始皇帝暗殺を企てたことを謀る。荊軻と秦舞陽という兵が刺客として秦に赴いたが、失敗する。本節（二）の冒頭に掲出した『明月記』治承四年九月の条には「陳勝・呉広、大沢より起り、公子扶蘇項燕と称するのみ。」とあった。これを意訳すれば「かつて秦の時代に、陳勝や呉広が大沢に蜂起した時、公子扶蘇や項燕の名を騙った故事とまさに同じことだ。頼朝が最勝親王（以仁王）の命令と称して、周辺の国々を従えようとしているというのである。」となる。それと同じであった（「『明月記』（治承四年）を読む」（『明月記研究』４号・一九九九年十一月）。本章段の最後の場面には、

秦始皇ハ遁テ、燕テ、燕丹遂ニ滅ニキ。恩ヲ忘レ契ヲ変スル者ハ、昔モカウコソ有シカ。サラハ今ノ頼朝モサコソアランスラメ」ト色代スル人モ多カリケリ。

と描かれている。まだ現今の時局では、平家が優勢であったので燕の丹と同様であると頼朝をあざ笑う人々がいたと括ってはいる。その後の章段「文学高雄山神護寺勧進事（同流罪事）」・「文学福原新都馳上院宣申下与頼朝事」になると、文覚が頼朝に旗揚げを如何に進言していたかを詳細に押し出して、「権亮少将惟盛東国討手発向事（同富士河逃上事）」の章段に及ばせ、

権亮少将惟盛、副将軍、薩摩守忠度、二人大将軍ニテ、其勢三万余騎、九月十八日福原ヲ立ッ。

として、平維盛の率いる軍勢が水鳥の羽音を源氏側の武士の襲来と信じて、平家の軍勢が逃亡したので、

兵衛佐身レ之、馬ヨリ下リ、都ノ方ヲ三度伏拝ミ、「全ク是レ頼朝カ名誉ニアラス、偏ニハ八幡大菩薩ノ御計成」トソ宣ケル。

とあって、二重傍線部を付したように頼朝が社稷神に拝礼したと描いた。この物語の展開は、『愚管抄』別帖の順徳天皇が在位している建保七年（一二一九）正月の治世で、

猶〳〵頼朝ユヽシカリケル将軍カナ。ソレガ孫ニテカヽル事シタル武士ノ心ギハ。カヽル者出キ。又ヲロカニ用心ナクテ、文ノ方アリケル実朝ハ又大臣ノ大将ケガシテケリ。又跡モナクウセヌルナリケリ。

（巻六――三一二～一三ページ）

と慈円が叙述していくのと同一の視座である。三代将軍源実朝を指弾し暗殺されていく顛末をめぐる展開に及ばせて、傍線部のように既に正治元年（一一九九）に没してしまっている初代将軍の頼朝を殊更に取り出し礼讃している。さらに別帖で順徳天皇の条を括って添えられた跋文の末尾には「冥顕二法」の道理に則って、

タヾ八幡大菩薩ノ照見ニアラハレマカランズラン。　（巻六——三一八ページ）

との言辞を慈円は象嵌する。物語で予期に反して富士川で平家軍が敗走したので頼朝が「八幡大菩薩ノ御計也」と象ったのと同質の視座なのである。

慈円圏で創出した物語の趣向と慈円の史論の叙述展開とは軌を一にしている。

三　『方丈記』と『明月記』

治承四年（一一九〇）六月二日に平清盛は福原遷都を断行して、後白河院は福原に監禁された。そこで物語では、

「是ク国々ノ異賊攻登リ、平家都ニ跡ヲトヽメス可レ交二山林一前表カ」トソ人申ケル。

（巻五・「文学福原新都馳上院宣申下与頼朝事」）

としている。平家一門の都落ちを人が予告したと描き、その直後を、

同六月八日、福原ニハ新都ノ事始有ヘシトテ、上卿ニハ徳大寺左大将実定卿、土間門宰相中将通親卿、奉行ニハ頭弁光政、蔵人左弁行隆、官人共相具テ、

としており、傍線を付したように徳大寺実定をとりあげながら、二重傍線では慈円圏に参画していた行長の父を併記し、

旧都ハ已ニウカレヌ。新都ハ未二奉行一。只有トシ有人、皆浮風雲ノ思ヲナス。本此処ニ栖者ハ地ヲ失テ患ヒ、今ウツル人々ハ土木ノ煩ヒ歎キアヘリ。スヘテ夢ノ様成シ事共成也。

との文飾をしている。これは『方丈記』の、

右京はすでに荒れて、新都はいまだ成らず。ありとしある人は、皆浮き雲の思ひをなせり。もとよりこの所にある者は、地を失ひて憂ふ。今移れる人は、土木のわづらひある事を嘆く。

との文章から、慈円圏で創出された物語では摂取していたわけだが、六巻本に再編されている物語を祖本としている延慶本にはない。この事実は刮目に価しよう。それは以下の理由からなのである。和歌所の開設は建仁元年（二〇一）七月二十七日、翌月の八月十五日には「月見」の行事を後鳥羽院主催が挙行されていると綴った。すなわち「撰歌合　建仁元年八月十五夜」であって慈円・藤原良経等も詠じ、定家の四首の歌に対して鴨長明は、

夜もすがらひとり深山の槇の葉にくもるも澄める有明の月

の歌を含む四首を詠じ、当歌合の判者に俊成はその四首全部を「勝」との判定をくだす。廟堂の初舞台で長明には文句のない上々の出来栄えであった。[10]『明月記』同日の条に、

大臣殿に参ず。御共して院に参ず。小時ありて、和歌所に出でおはします。寄人等を召す。（中略）次で当座の題あり。月前の雁。」月前の旅。月前の恋。又之を詠ず。

と記載しており、九条家の家司であった定家は、その十年後の承元四年（一二一〇）頃からの慈円圏で長明の『方丈記』を取り込みながら物語の実定が今様をうたう形象をしていくからであった。そのことを、物語からも窺っていこう。

『明月記』治承四年（一一九〇）九月十五日条は、遷都後の京を、

十五日。甲子。夜に入り、明月蒼然。故郷寂として車馬の声を聞かず。歩み縦容として六条院の辺りに遊ぶ。夜漸く半ばならんと欲す。天中光る物あり。其の勢、鞠の程か。其の色燃ゆるが如し。忽然として躍るが如く、坤より艮に赴くに似たり。須臾にして破裂し、炉を打ち破るが如し。火、空中に散じ了んぬ。若しくは是れ大流星か。驚奇す。大夫忠信・青侍等と相共に之を見る。

と記載していた。殺伐とした時局のもとで、十一代前の白河天皇（院）の荒廃してしまっている六条内裏を徘徊し、感傷的になっている定家は、夜半になろうとする頃に流星を俊成の家人と眺めていた。これも物語で、実定が旧

都に戻って

何事モハヤ替ハテヽ、門前草深ク、庭上露滋シ。蓬カ杣、浅芽カ原ト荒終テ、虫ノ声々恨ツヽ、黄菊紫蘭ノ野辺トソ成ニケル。古郷ノ名残トテハ、今近衛河原ノ大宮計ソ坐シケル。実定卿其御所へ参テ、

（巻五・「徳大寺左大将実定卿旧都近衛河原皇大后宮大宮御所被参事」）

と描かれている。やはり安徳天皇より五代前の近衛天皇と三代前の后となった多子が住んでいる御所へ出向いて、前掲したように多子に仕えている小侍従に実定は今様をうたう形象と相即している。時空が『明月記』と極めて近似しており、物語の本章段に直結するのが「福原怪異事」の章段なのである。そのなかに「人々ノ夢ニモ悪ク見へ、常ニ心騒キシテ、怖キ変化ノ物共多カリケリ。」と描かれており、

其比源中納言雅頼ノ許ニ候ケル青侍カ見タリケル夢モ、不思議也。

として、「今ハ伊豆国流人前右兵衛左源頼朝ニタバラスル也」ト被仰ㇾ夢ヲ見テ、人ニ語程ニ、……」とあり、「高野ニ御坐シケル宰相入道、此事共ヲ伝聞テ、」との後に、その宰相入道は、

節刀ヲハ伊豆国流人源頼朝ニタバウスルナリト被ㇾ仰ケルト云ハ、八幡大菩薩ニテソ坐シツラン。

答弁したと描かれていた。ところが、六巻本に再編された物語を祖本としている延慶本では、

世ノ末ニ源平共ニ子孫尽テ、藤原氏ノ大将軍ニ可ㇾ出ニヤ。

（二中・三四「雅頼卿ノ侍夢見ル事」）

となってしまっている。九条家の三寅（頼経）が四代将軍に就くことまでを予言した。頼経の父の九条道家は慈円周辺圏を主道して、『愚管抄』を摂取して『治承物語』を六巻本に再編したからなのである。

四　頼朝の観音信仰と大姫入内

治承四年（一一八〇）八月十七日の夜、頼朝は挙兵して伊豆の目代の平兼高の館を急襲して滅ぼしたものの、同月二十三には石橋山で相模の大庭景親・伊豆の伊東佑親・武蔵の畠山重親らと合戦し大敗してしまう。物語の「伊

豆国流人前右兵衛佐頼朝謀叛之由大庭三郎景親早馬京着事」（巻五）の章段では、

兵衛佐散々打散サレテ七八騎ニ打ナサレ、大童ニ成テ椙山ニ逃籠候ヌ。其後畠山庄司次郎五百余騎ニテ御方ヲ仕ル。（中略）船ニ乗テ、安房上総へ渡ヌ」トコソ申タレ。

とあって、頼朝は房総半島から上総国へ逃走していったと描いている。傍線部の「椙山」に逃げ籠もったとはどういうことか。

現在の神奈川県真鶴町の「土肥椙山観音像群」と呼ばれている「鵐巌」に頼朝は潜んだということなのである。[11]

傍線部「椙山ニ逃籠候」とは、長門本の「石橋合戦事」（巻十）では、

まさしくここまで六七がほどのあしあとある物を。いづちへおちぬらん」とて東西をさがす。（中略）佐殿、かたき行さりて候。「あらふしぎや。八幡大ぼさつ、寔に頼朝をばまぼらせ給ひけり。『月のまへにうさぎあり』と、いふ事のある物を、大菩薩の本地、阿弥陀と申せば、観音、せいし、わきのしとしまします。月則せいしなり。今は当国をしるべきいんゑんうたがひあらじ」とて、大にかんじ給ひけり。

との場面がある。頼朝の強烈な信仰が浮上しているわけだが、『吾妻鏡』治承四年十二月二十五日の条に、

弐五日　癸卯　石橋合戦の刻、巌窟に納めらるるところの小像の正観音は、専光房の弟子の僧、閼伽桶の中に安んじたてまつりてこれを捧持し、今日鎌倉に参著す。去月仰せ付けらるるところなり。数日山中を捜し、かの巌窟に遇ひて、希有にして尋ね出したてまつるの由、これを申す。武衛手を合せて直に請け取りたてまつりたまふ。御信心いよいよ強盛なりと云々。

とあって、同年八月二十三日に頼朝は旗揚げして石橋山に陣を取り、平家側の軍勢と応戦した後に巌窟に観音像を安置して、鎌倉へ戻ってから、その観音像は頼朝の許に届けられた。観音信仰を頼朝は深めていく。そのことは、すでに『吾妻鏡』治承四年（一一八〇）八月二十三日の条に、

時に梶原平三景時という者あり。たしかに御在所を知るといへども、有情の慮を存じ、この山には人跡なしと称して、景親が手を引きて傍の峯に登る。この間、武衛御髻の中の観音像を取りて、ある巌窟に安んじた

てまつらる。実平その御素意を問ひたてまつるに、仰せて云はく、首を景親等に伝ふるの日、この本尊を見ば、源氏の大将軍の所為にあらざるの由、人定めて謗りを貽すべしと云々。件の尊像は、武衛三歳の昔、乳母清水に参籠せしめて、嬰児の将来を祈ること懇篤にして、二七個日を歴て、霊夢の告を蒙り、忽然として二寸の銀の正観音の像を得て、歸敬したてまつるとこころなると云々。

と記載されていた。梶原景時が頼朝を探し当てたが、見て見ぬ振りをして去った直後に頼朝は自己の髻の中から観音像を取り出して、巌窟に安置したので、それを怪訝に思った実平が問いかけたところ、「自分の首が敵の手に渡ったなら、この像を見て、源氏将軍のすることではないと後々まで非難するであろう。」と頼朝は返事した。さらに観音像をめぐて頼朝は回顧し、三歳の時に乳母が清水寺に参籠して自己の将来を懇ろに祈り、十四日を経過して夢のお告げがあり、忽然と二寸の銀の観音像があらわれたので、帰依して今に至るまで崇敬してきた、と。その観音像が旗揚げの四ヶ月後の十二月二十五日に頼朝の許に戻った、と同日の条にはある。そもそも『吾妻鏡』は、廟堂の文書や『明月記』等を活用しながら、新たな物語を生み出している。[12] 当該の長門本の場面は、慈円圏で創出された「頼朝の物語」にすでに描かれていた。[13] 要するに長門本の方が『吾妻鏡』より古伝承を摂取していたことになろう。

頼朝と政子とには、前節（一）で既述したように長女の大姫がいた。頼朝が上洛する二年前の建久四年（一一九三）九月十八日の『吾妻鏡』の条に、

十八日　辛巳　将軍家、岩殿・大蔵等の両観音堂に詣でしめたまふ。姫君御不例の時御立願と云々。

とあり、傍線部で大姫の病気があるので願をかけ、同年八月二十三日条に「姫君の御不例御減」と続け、大姫はいくらか小康をとりもどしたので、同月二十九日条では「御台所、岩倉観音堂に詣でたまふ。」とあるように政子は岩殿寺（神奈川県逗子市久木に所在）に大姫のために参詣し、二十日後の九月十八日条には「将軍家、岩殿・大蔵等の両観音堂に詣でしめたまふ。」とあるように、ふたたび岩殿寺そして杉本寺（鎌倉市二階堂に所在）、「大蔵」の観音堂と通称されている観音霊場へ参詣していたと記している。翌年の建久五年（一一九四）八月十二日の条では、

十二日　己亥　左女牛の宮寺において、別して御祈祷を抽んずべきの由、季厳亜闍梨に仰せ遣はさると云々。

とあるので、頼朝は傍線の「八幡宮寺」で平癒の祈祷をするように当寺の別当に指示した。[14]

頼朝が伊豆配流中に生誕した大姫が病に罹ったのは父の頼朝の幕府を立ち上げていく政治行動と密接している。大姫が五、六歳頃に木曽義仲が寿永二年（一一八三）に頼朝との仲を良くするため嫡子の十一歳の志水義高を頼朝に託した。頼朝は喜んで許し、大姫を義高の許嫁にした。ところが義仲の敗死後、頼朝は命令して義高を討ち取ってしまった。大姫は悲嘆して病床に伏す。そこで頼朝は、義高を殺した郎従を梟首にしたが、そのことがかえって仇（あだ）となって見る影もないほどに大姫の病は悪化していく。娘を見るに見兼ねて、頼朝は年来の観世信仰へ強く傾斜しはじめる。周知のように、この信仰は飛鳥時代に伝わり、十世紀末以降から多面性を帯び、殊のほか京や畿内では現当二世の利益を兼ねることから流行していった。そこで東大寺再建に莫大な種々の援助をしていた頼朝は、最初の上洛とは異なり、妻の政子をはじめ子息の頼家そして大姫をともなって表向きは東大寺再建供養の儀式に参列するためとした。しかし二回目の上洛の六ヶ月前の『吾妻鏡』建久五年（一一九四）七月二十九日条に、

廿九日　戊子　将軍家の姫君、夜より御不例。これ恒の事たりといへども、今日殊に危急。志水殿事あるの後、御悲嘆の故に日を追ひて御憔悴。

とあり、傍線部にあるよう「志水殿」すなわち義高が亡くなってから大姫が「憔悴」と記載されている以上、病弱の大姫の父として上洛する動機にあった。その期間は建久六年（一一九五）三月四日、鎌倉帰着が七月八日であり、四ヶ月間にも亘ったのは、娘の快癒を観世音菩薩への切願したからである。『吾妻鏡』同年四月三日の条に、

三日　戊午　将軍家ならびに御台所・姫君等、密々に清水以下の霊地を巡礼したまふと云々。

とあり、当時は全三十三番観音霊場の札所巡りの二十八番にあたる清水寺から、「密かに」にも三十一番札所の西山の善峯寺にも巡礼した。それは善峯寺の楼門には文治五年（一一八七）六月三日より同月十八日に慈円の師である観性が頼朝の仏事のために下向し、その報謝のために楼門に金剛力士像を運慶に作らせ、安置されていたか

らである。二度目の上洛の建久六年三月三日に金剛力士像を頼朝は拝観するためであると同時に大姫の快癒を祈念するためであった。[15] しかもこの善峯寺の北尾にある往生院を含む空間は、頼朝が巡礼した時より四半世紀近く後の承元四年（一二一〇）頃から慈円圏が組織され、「頼朝の物語」を内実とする物語が創出されていくのである。

頼朝の上洛の目的には政治行動の一環として大姫入内であり、京の廟堂と鎌倉幕府との連携を意図している。永原慶二は、

兼実に圧迫を加えていた宮廷の権利者丹後局＝高階栄子とも会談した。その目的の一つは、大姫の入内問題であったとみられる。（中略）その実現によって、〝公武協調〟をつよめようとしたのであった。（中略）ひいては幕府の王朝にたいする発言権を減退させることになるので、頼朝としては何とかして緩和をはかれねばならなかったのである。（中略）総じて王朝側との対立をできるだけ回避しようとする一貫した彼の方針に発していた。[16]

との看過できない指摘をしている。同様に河内祥輔も、

後鳥羽との間の絆（きずな）をどのようにつくるか、ということが課題なのである。[17]

と指摘した。要するに当時の治世の動向から鎌倉幕府の大将軍としての立場から東大寺再建供養の儀式に参列した。再説するが、頼朝の心底には、上洛の動機として観音菩薩へ大姫の「病気平癒」にあずかるための思惑が入内のその目的にあった。

五　「冥顕二法」の道理と頼朝の「武」

『愚管抄』別帖の後鳥羽院天皇の条に、

同六年三月十三日東大寺供養、（中略）コノ東大寺供養ニアハムトテ、頼朝将軍ハ三月四日又京上シテアリケリ。供養ノ日東大寺ニマイリテ、武士等ウチマキテアリケル。大雨ニテ有ケルニ、武士等ハレハ（我は）雨ニヌルルトダニ思ハヌケシキニテ。ヒシトシテ居カタマリタリケルコソ、中〻物ミシレラン人ノタメニハヲドロカ

シキ程ノ事ナリケレ。内裏ニテ又タビ〳〵殿下見参シツヽアリケリ。コノタビハ萬ヲボツカナクヤアリケム、六月廿五日ホドナク下リニケリ。

（巻六——二八〇ページ）

としており、東大寺再建供養へ上洛してきた頼朝の率いる軍勢の威勢である「武」の側面を精細に叙述し、傍線部では九条兼実と頻繁に会談したことを摘記した。実相を慈円は叙述していよう。二重傍線部は建久七年の政変で九条家の家運後退を先説し、時宜相応につくり替えられていく道理に則りながら、以降の時局をも見据えている慈円の感慨が当該の文章の行間に介在していよう。それは、上洛してより鎌倉へ下向していくまでの滞在期間は、第一回目では四十七日でありながら、『愚管抄』の全行数は四十二行（岩波書店『日本古典文学体系』の本文）もあった。第二回目は四ヶ月の長期であるにもかかわらず、前節「四　頼朝の観音信仰と大姫入内」で言及したように一回目の上洛をめぐる文章の四分の一でしかないからである。『愚管抄』別帖の後鳥羽天皇の条では、当該の文章の以下には頼朝が鎌倉下向した二ヶ月後の事象をめぐって、

此年八月八日、中宮御産トノノジリケリ。イカバカリカハ、御祈前代ニモ過タリケリ。サレド皇女ヲウミマイラセラレテ。殿ハ口ヲシクヲボシケリ。（中略）院モ、「アマリナルホドノムスメカナ」トヲボシメシテ、ツネニムカヘタテマツリテ見マイラセテハ、御心ヲユカシ給ケリ。後ニハ院号アリテ春花門院ト申ケリ。コノ門ノ名ヲゾ人カタブキケル。

（巻六——二八〇ページ）

としている。九条兼実の娘の中宮任子には皇子ではなくて皇女が生誕し、傍線部で外戚を築くことが不可能になった兼実は痛嘆したと慈円は摘記した。二重傍線の「春花門院」との院号名に「春の桜」の「はかなさ」が表されていると人が噂しあっているとの文飾をしたのは、『新古今和歌集』の代表的歌人としての慈円の修辞が看取されよう。この直後には、建久七年の政変をめぐって、

カクシテ又仏神ノ加護モエアルマジキ時イタリニケレバ、同七年ノ十一月廿三日ニ、中宮ハ八条院ヘイデ給ヒニケリ。

（巻六——二八一～八二ページ）

として、傍点を付したように慈円は「冥顕二法」の道理に則って、出自の九条家側から冥衆の計らいの叶わない

時局に陥ったと批評した。第二回目の頼朝上洛の事象をめぐる全七行は、多量の言辞を削ぎ落としてエッセンスだけを抽出していよう。再言するが、当該の文章の基底には慈円の張り詰めている思念がこもる。『愚管抄』の第二回目の上洛が四ヶ月間に亘っていながら、全七行の行間には末代の道理が介在しているので、別帖の順徳天皇の条には、九条家の頼経が四代将軍継嗣として承久元年（一二一九）六月二十五日に東国へ下向していく事象へ及ばせる直前で三代将軍の源実朝の暗殺を詳述して

猶〳〵頼朝ユヽシカリケル将軍カナ。ソレガムマゴニテ、カヽル事シタル。武士ノ心ギハカヽル者出キ。又ヲロカニ用心ナクテ、文ノ方アリケル実朝ハ又大臣ノ大将ケガシテケリ。亦跡モナクウセヌルナリケリ。

（巻六――三一二～一三ページ）

と、傍線部にあるように、その時局より二十年前に死去してしまっていた頼朝を礼讃しながら、実朝を「文」へ傾斜させたと指弾するからである。建保七年（一二一九、承久に改元するのは四月十二日）一月二十七日の実朝の死直前での文章であるから、頼朝を取り上げるのは時間推移に照らして唐突になってしまっている。「武」の象徴的人物としての頼朝が慈円の念頭に置かれているからであった。奥州征伐の事象をめぐって、

頼朝ハ鎌倉ヲ打出ケルヨリ、片時モトリ弓セサセズ、弓ヲ身にハナツ事ナカリケレバ、郎従ドモヽナノメナラズヲヂアイケリ。手ノキヽザマ狩ナドシケルニハ、大鹿ニハセナラビテ角ヲトリテ手ドリニモトリケリ。

（巻五――二七一ページ）

と、すでに「武」の側から頼朝を捉えていたのも顧慮されてくる。

慈円の出自である九条家の後退に関わる大姫入内について、通親の側を指弾する視点で建久七年の政変を叙述している。慈円圏で創出した「頼朝の物語」を下敷きにしながら、『愚管抄』のモチーフの霊告に則って第二回目の頼朝上洛をめぐる事象を叙述したのであった。要するに、京の廟堂と鎌倉幕府との安定が頼朝の上洛の目的であった。[18] 既述したように、併せて幼少より強烈に懐いている観音信仰によって観音霊場の札所の清水寺そして自己が寄進した金剛力士像を安置している札所の善峯寺へ参拝して、冥衆の観世音菩薩に大姫の快癒と入内を果

たす目的があった。

政変の前夜の頼朝上洛をめぐる『愚管抄』の全七行の行間には、「冥顕二法」の冥衆の計らいが通低する。天台教学をきわめた学僧にして『新古今和歌集』歌人の慈円のアンビバレントな修辞が介在していよう。そのことをさらに窺っていこう。

六　『新古今和歌集』から末代の道理へ

醍醐天皇の第十四皇子が即位した。村上天皇であって、当天皇の命によって第二番の勅撰和歌集が選進される。すなわち『後撰和歌集』で、はじめて和歌所が設置された。それに倣って、建仁元年（一二〇一）七月二十七日に和歌所が置かれて定家は寄人に選ばれ、第八番目の『新古今和歌集』の撰者に下命される。定家の歌風は九条家の中で育まれ、洗練させた感覚と高度な教養を共有する密接な集団的雰囲気を醸し出していく。古典を媒介として想像によりながら詩情の世界を構築し、虚構的世界を現出させようとして本歌取り・本説取りの修辞を駆使しつつ幻想的・官能的な物語的世界を詠作しだしている。[19]

『新古今和歌集』（巻十・羇旅）には、

道すがら富士の煙も分かざりき晴るる間まもなき空のけしきに　　前右大将頼朝　（九七五）

との頼朝の歌が採られた。率直でおおらかな叙景歌であって、久保田淳は、

頼朝が二度目の上京の途上この一首を得、それを慈円に語った（中略）陸奥を制圧し、東国の主となりながら、都への回帰の念を捨てきれなかった頼朝の血が流れているのである。

とみなし、他方では、

この東大寺供養に臨むために上京した源頼朝は、九条兼実や丹後局ら京都の要人達と会合を重ねるかたわ

ら、天台座主であった慈円と七十七首に上る和歌の贈答を交わしている。（中略）この贈答歌は少なからず興味をそそるのである。

と論じている。[20] この指摘は、（四）節で既述したように、頼朝が我が大姫を入内させることで慈円の兄の兼実と協調していく治世を築くことを切願していたからであった。その時よりも十五年後の承久元年（一二一九）六月二十五日に兼実の孫である道家の三男の三寅こと頼経が将軍継嗣して下向する。その事象をも見据えた慈円は、『愚管抄』別帖の跋文で、

サテ此日本国ノ王臣武士ノナリユク事ハ、事ガラハコノカキツケテ侍ル次第ニテ、皆アラハレマカリヌレド、コレハヲリ〳〵ノ道理ニ思ヒカナヘテ、然モ此ヒガ事ノ世ヲハカリナシツルヨト、其フシヲサトリテ心モツキテ、後ノ人ノ能〳〵ツヽシミテ世ヲ治メ、邪正ノコトハリ善悪ノ道理ヲワキマヘテ、末代ノ道理ニカナヒヒテ、仏神ノ利生ノウツハ物トナリテ、今百王ノ十六代ノコリタル程、仏法王法ヲ守リハテンコトノ、先カギリナキ利生ノ本意、仏神ノ冥応ニテ侍ルベケレバ、ソレヲ詮ニテ書ヲキ侍ルナリ。（中略）ノコル事ノヲヽサヽカキツクサヌ恨ハカ及バズ。（中略）タヾ八幡大菩薩ノ照見ニアラハレマカランズラン。ソノヤウヲヌカキツケツヽ、心アラン人ハシルシクハヘラルベキ也。

（巻六――三一七～一八ページ）

として、八十四代順徳天皇の在位している治世の動向を以て別帖を括った。巻第六の文章は終結する。傍線部で時宜相応につくり替られていく道理と捉えながら、二重傍線部に及ばせて末代の道理の一つと揚言する（二つ目は二年後の承久三年四月二十日の道家が八十五代仲恭天皇の摂政に就任する事象）。傍線部の時宜相応の道理につくり替えられる事象そのものを当該の跋文の直前で、

六月廿五日ニ、武士ドモムカヘニノボリテ、クダシツカハサレニケリ。京ヲ出ル時ヨリクダリツクマデ、イササカモ〳〵モナク声ナクテヤマレニケリトテ、不可思議ノ事カナト云ケリ。

（巻六――三一五～一六ページ）

としていた。この傍点部の意味は、人知では測り知ることができないとの寸言に置きかえられよう。幕府から差し向けられた武士のよって二歳の道家の三男（頼経）が四代目の鎌倉幕府の将軍継嗣と下向していく事象を冥衆

の計らいとして慈円は把捉したからなのである。それ故に、「冥顕二法」の道理の「冥」の側から説諭した。そのため、別帖の跋文の波線部「カキツクサヌ恨ハ力及バズ」・「心アラン人ハシルシクハヘラルベキ也」との思念を繰り返し、さらに別帖の跋文をうけて付録の文章が書き足されていく。巻第七の前半部の「史」の論であった。

「史」の論には、

イマ左大臣ノ子ヲ武士ノ大将軍ニ、一定八幡大菩薩ノナサセ給ヒヌ。人ノスル事ニアラズ、一定神々ノシイダサセ給ヒヌルヨトミユル、フカシギノ事イデキ侍リヌル也。（巻七——三三六ページ）

とあるので、前掲した将軍継嗣の下向の事象の寸言である傍点部「不可思議ノ事」と照応している。また前掲の別帖の跋文にあった傍点を添えた箇所は前掲した別帖の跋文の「八幡大菩薩ノ照見」を再説したものであった。

「史」の論を括るにあたっては、

大菩薩ノ御心ニカナフベキ。不レ足レ言ト云ハコレナリ。スコシハ、世ノウツリ物ノ道理ノカハリユクヤウハ、人コレヲワキマヘタケレバ、ソノレウニコレハカキツケ侍レド、コレヲミム人モワガ心ニイレレバサラニカナウマジ。コハイカゞシ侍ベキ。サレバ摂籙家ト武士家トヲヒトツニナシテ、文武兼行シテ世ヲマモリ、君ヲウシロミマイラスベキニナヌカトミユルナリリユク。（巻七——三三六～三七ページ）

とし、「史」の論の最末尾に、

神武ヨリケフマデノ事ガラヲミキダシテ思ヒツゞクルニ、コノ道理ハサアスガニノコリテ侍ル物ヲトサトラレ侍ヌ。（中略）タゞ一スヂノ道理ト云コトノ侍ヲカキ侍リヌル也。（巻七——三四三ページ）

としたのである。まさしく別帖の跋文を敷衍した。ひとまず別帖よりの叙述内容を打ち切っている。これが「史」の論の眼目であるわけだが、以下の中間部には後鳥羽院へ討幕計画を諫止するための率直な「諫言」を行い、後半部では腐敗した深刻な治世をめぐる「人材論」へ展開させていく。三つの異なった文章で構成されている。中間部・後半部とは末代の道理を叙述している角度ではない。時宜相応につくり替えられていく道理へ向けての慈円の思念が破綻してしまっている。

『愚管抄』全体の枠組みからは逸脱しており、「諫言」・「人材論」の二つの文章の趣旨をもとにしたならば「付録」との名称は、別帖の巻第三から巻第六までの時宜相応につつくり替られていく道理からは適切になってくる。要するに巻第七の文章そのものを「付録」との名にしたのは、『愚管抄』別帖の叙述からは実態にかなう。[21]

『新古今和歌集』の代表的歌人の慈円は、天台座主を四度も歴任しているので、現実肯定の色彩の強烈な本覚思想を体得している。本覚思想とは「諸法実相論」であって、物語を企画・創出させた空間で、慈円は、

西山往生院より眺望には、宇治、伏見等　鳥羽院等也。

わが山は花の都の艮に鬼ゐる門をふたぐとぞ聞く　（四八〇〇）

世を行くにいくらの道のあるならむ人の心の迷はぬはなき　（四八〇三）

ふたつして胸にたゝかふ夜なく道行月を見るぞうれしき　（四八〇四）

と詠じていた。四八〇〇番歌では「山門」の比叡山延暦寺が京洛の鬼門を防いでいるとし、四八〇三番歌では世の中を生きていくのに迷わない人はいないとし、四八〇四番歌には人の葛藤と定まった運行をまもっている月すなわち仏法の不変の真理とを比較している。仏と衆生とは平等と見なして民衆へ寄せる愛情を籠めたのであった。同時期の承元三年（一二〇九）十月十五日の「厭離欣求百首」では、

思ふ哉苦しき海に渡し守ふかき闇路に法の灯　（三一六五）

頼むぞよ霊山海界釈迦大師たれゆゑとてか世に出たまふ　（三二五四）

と詠じている。三一六五番歌には人の我執からの迷いを癒す仏法が照らし出しているとし、三二五四番歌にあっては冥衆が「人」を救うために出現するとの思念が介在するからには、本稿の冒頭「アンビバレンスということ」の節に掲出した『愚管抄』の「頼朝関東ヨリヤウ〳〵ニメデタク申ヤクソクシテ、世ノヒトヲチヒヌト世間ノ人モ思テスギケリ。」に呼応してくるであろう。

和歌所が設置され、慈円をはじめとして定家等の十一名が寄人に任じられた。『新古今和歌集』撰集作業をすすめ始めるのは建仁元年（一二〇一）七月二七日であり、本歌集の真名序には、

誠是理世撫民之鴻徽、賞心楽事之亀鑑者也。

とあって、意味は「まことに、和歌は世を治め、「民」すなわち「人」をいつくしむ大もとであって、めでる心や楽しむことの模範となるものである」であり、この言辞が嵌め込まれた後の、建保四年（一二一六）十二月二十六日、最終的本文が清書され、そこには仮名序もそなわった。すなわち、

その道盛りに興り、その流れ今に絶ゆることなくして、色にふけり心をのぶるなかだちとし、世の民をやはらぐる道とせり。

としたのである。終功の竟宴のあった二日後から「切継」が行われていった際にも傍点を付したように「民」が添えられた。承元四年（一二一〇）頃よりの五年間は、本歌集編纂期であり、そのまま慈円圏が組織されている時期と完全に一致し、建保六年（一二一八）頃から承久三年（一二二一）四月二十日にかけての時期に『愚管抄』を叙述している慈円は、真名と異なる仮名の『今鏡』を引き継いでいる『治承物語』を取用して道理を説いていった『愚管抄』の皇帝年代記の末尾に、

仮名ニカクバカリニテハ倭ト詞ノ本體ニテ文字ニエカヽラズ。仮名ニ書タルモ、猶ヨミニクキ程ノコトバヲ、ムゲノ事ニシテ人是ヲワラフ。（中略）此詞ドモノ心ヲバ人皆是ヲシレリ。アヤシノ夫トノ丰人マデモ、此コトノハヤウナルコトグサニテ、多事ヲバ心エラルヽ也。（巻二――一二七ページ）

と叙述した。仮名を交えながら叙述している意図は、真名序・仮名序の「民」と同一の意味である。ここにも『新古今和歌集』代表的歌人慈円としての修辞の援用が傍点部の『愚管抄』の文章に看取される。

近時、中世和歌の諸相をめぐって考察した木村尚志は、「序章　和歌史の「中世」をめぐって」には、[22]

天台本覚思想は、京、鎌倉の二元支配構造を支えた中世の政治思想にも影響を及ぼした思想（中略）保元・平治の乱から治承・寿永の乱に至る長期の内乱となった。（中略）心の平安を求める人々の需要に応え、対立の統一と人間の平等を説く思想である天台本覚思想が政治と文学の世界にも同時進行的に浸透していったのではないか。

との見解を披瀝している。筆者尾崎が付した傍点部については、

定家が西行に感化され、文治・建久年間に所謂「新儀非拠達磨歌」との非難を浴びたのは、中世和歌の歌の産みの苦しみであったのであろう。しかし、その苦しみは後に『新古今集』として結実し、「理世撫民之鴻徽（世を治め、民の肩をやすめる大事業）」（真名序）、「世を治め収め民をやはらぐる道」（仮名序）としての和歌の道を志した後鳥羽院の意志は、定家の弟子内藤朝親を通して『新古今集』を入手した実朝に受け継がれる。

と木村尚志が指摘している。他方、

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮れ　（一三五）

と詠じて、若手歌人として定家が自立し始める当時、『吾妻鏡』文治二年（一一八六）八月十五日の条には西行が重厳の委嘱により東大寺再建の砂金勧進の旅で、源頼朝に出会って、

……心静かに謁見を遂げ、和歌の事を談ずべき由、仰せ遣はさる。西行承るの由を申さしめ、（中略）罪業の因たるによつて、その事かつて心低に残し留めず、皆忘却しをはぬ。詠歌は、花月に対して動感するの折節、わずかに卅一字を作るばかりなり。全く奥旨を知らず。（中略）その詞を記し置かしめたまふ。綷（ことと）終夜を専らにせらるる云々。

と記載されていた。『吾妻鏡』の本年月日の条をめぐって、やはり木村尚志は、

京への限りない憧憬を寄せる頼朝である。（中略）武道ならばともかく、仏道修行そのものと認識していた歌道について「全く奥旨を知らず。」と話したということはどうしてか。（中略）無常を悟り、名利の虚しさを知り、出離解脱へと向かう主体性を、歌に心を澄ます数奇を通して身に着けたのである。（中略）その奥深い真意を朝廷と幕府の〈対立の統一＝中道〉を模索していた頼朝が解した可能性に筆者は興味を覚える。

との見解を添えた。筆者尾崎が施した傍線の「対立の統一」は和歌研究の視点からの指摘であるだけに、歌人でもある慈円が企画して定家も参画した物語からは興味津々となってこよう。大姫入内をめぐる頼朝の真意と近似してくるし、傍線部「対立の統一＝中道」の言辞も物語の「アンビバレンス」と呼応するであろう。

周知のように初めて比叡山に入った最澄は『法華経』をおさめる宝塔六箇所を全国に置き、第十八天台座主良源の時に「山門」は東搭・西塔・横川の三つ区域がそれぞれ成立してくる。良源の弟子の源信は横川を拠点にして、『往生要集』（巻中）で、

無明の病に盲られて、久しく本覚の道を忘れたり。

とあって、「本覚」の語彙を加えた。第三天台座主円仁の頃より密教化の過程で本覚思想が「山門」の空間に根づき、力動性の富む日本特有の展開の天台教学は平安時代後期から際立っていく。絶対肯定の立場から衆生も本来的に覚っているとの教義は、広く各層に浸透していった。四度も天台座主を歴任した慈円が、源信の弟子である源算が西山に善峯寺を建立、その北尾に往生院と号する庵室を設けて隠遁生活に入り、往生院の第三代院主となった慈円が、その空間で承元四年（一二一〇）頃から企画・創出させた物語に武士などの衆生を描く。「愚癡無智ノ人」にも説諭した『愚管抄』へ本覚思想を介在させていくのは至当のことである。

『明月記』元久元年（一二〇四）十二月九日の条に、

九日。点晴る。今日、始めて法華経を書き奉る。

と記載して、同月二十二日には、

廿二日。点晴れ、雪飛ぶ。今夕、一乗八軸を書き終へ奉る。

とし、元久二年正月一日の条にも、

終日、法花経第一巻を書き奉る。

同月十一日の条には、

昏に、法花経を書き終へ奉る。

と刻んでいた。物語を創出させる慈円圏に参画する頃には『法華経』の教義に精通しはじめている。『新古今和歌集』編纂を介し、『法華経』を所依の経典としている天台教学の学僧の慈円とも懇談しながら、定家は物語創出に尽瘁していったのはいうまでもない。

慈円の天台本覚思想の歌には、

露の身を玉ともなさんはちすばのにごりにしまぬわが心より　（三五〇五）

ながむべし池に蓮の花ざかり濁りにしまぬわが心より　（四三一一）

がある。三五〇五番歌では此の世の濁りに染まらないと仏徒しての自覚が、四三一一番歌では蓮から西方の阿弥陀浄土の思いをこめた。一方、定家は『法華経』を二度書写した時より十年後の建保三年（一二一五）九月十三日に、九条道家が主催した「内大臣家百首」での「釈教五首」の歌に、

あまつ空ひかりをわかつよつの身になにの草木ももるゝものかは　（一一九六）

きさらぎのなかばの空をかたみにて春のみやこをいでし月かげ　（一一九七）

こゝのへの花のうてなをさだめずはけぶりのしたやすみかならまし　（一一九八）

十あまりふたつの誓ひきよくしてみがけるたまのひかりをぞ敷く　（一一九九）

花にほふ四つの大空とほからであか月またぬあふことも哉　（一二〇〇）

と詠じている。一一九六番歌では冥衆の大日如来へ草木に至るまでの悉皆成仏と詠じ、一一九七番歌は釈迦が涅槃に入ったことを、一一九八番歌は阿弥陀如来が極楽浄土に引摂されなかったならば「煙の下」（地獄）が私の住みかであったとし、一一九九番歌では薬師如来の十二の請願は清く、菩提を得る時、その身は瑠璃の玉のように光輝くとし、そして一二〇〇番歌に及んでは無明長夜があける暁を待つことなく、弥勒菩薩がこの世に顕現されるのを待ちたい、との思いを籠めている。九条家に出仕し慈円と親交を重ねて、西山の慈円圏で物語創出している最中の五十四歳の釈教歌であった。現世と来世との対立関係にある空間をつなぎ合わせながら自然の中に冥衆の計らいをとらえている。本覚思想そのものが、一一九八番歌の修辞には幾分かは呼応しているように思われないでもない。定家の歌と本覚思想との具体的な関連の分析は今後の課題としたい。

西山へ隠棲し始めた四十七歳の慈円は、

承元二年二月廿三日、愚状之次、進二御所一詠一首

宮こには似ぬかいかにと深山辺の春の気色を人の問へかし　（五五七五）

勅答

山里は憂きがなぐさむ事こそあれ問はぬならひは〔欠字〕　（五五七六）

と、西山から後鳥羽院の許に書状を添えて詠じ、院も慈円の隠遁生活を慰めている。この贈答歌からも『愚管抄』の「冥顕二法」の道理に則りながら、別帖の順徳天皇の条を括り、跋文に及ばせる直前で後鳥羽院を、

不カ思ギノ君ノ御運、御案ノメデタサト、心アル人ハコレラノミメデタクゾ思タリケル。（巻六——三一七ページ）

とあるように礼讃していくのと対応する。ところが付録の中間部の「諫言」では討幕計画諫止を論旨にしており、ひたすら院に対して慈円は詰め寄っていく。別帖から付録の「史」の論までには、慈円が「以前から心中に密かに弁えてきている」討幕計画そのものを、

カネテヨリ心得フセテ侍レ。（巻七——三四六ページ）

として、付録の中間部では率直に慈円は後鳥羽院へむけての「諫言」して、

冥顕、首尾、始中終、過現當　イサヽカモ事ノ道理ニカナフミチ侍リナンヤ。（巻七——三四六ページ）

であるので、赤裸々に院に直言した。時宜相応につくり替えられていく道理を逸脱させてしまったのである。その後、元仁元年（一二二四）六月十三日に鎌倉幕府を主導していた北条義時死去の報に接した慈円は、徐々に末代の道理を確信し始めていく。[23] 皇帝年代記で、

三院、両宮皆遠国ヘ流サレ給ヘドモ、ウルハシキ儀ハナシトゾ世ニ沙汰シケル也。（巻二——一二六ページ）

として、前掲したように「仮名ニカクバカリニテハ倭ト詞ノ本體ニテ文字ニエカヽラズ。（中略）此コトノハヤウナルコトグサニテ、多事ヲバ心エラルヽ也。」として付録の「史」の論文章の趣旨を再説していく。それが傍線部の「立派な儀式」の言辞に象徴的に表現される。この言辞を添えてより以降に、

三年六月十三日関東武士将軍度々後見義時朝臣死去了。同十七日夕、息男武蔵守泰時下二向関東一畢。同

十九日舎弟相模守時房同下向了。　（巻二――一二六ページ）

とあるように、北条義時死去から弟の時房の関東への下向を摘記した。その直後に、

此皇代年代ノ外ニ、神武ヨリ去々年ニ至ルマデ、世ノウツリ行道理ノ一トヲカケリ。是ヲ能々心得テミン人ハ見ラルベキ也。偏ニ仮名ニ書ツクル事ハ、是モ道理ヲ思ヒテ書ル也。　（巻二――一二六～二七ページ）

とあって、『愚管抄』全体を鳥瞰して末代の道理に則りながら現今の治世に引き寄せて、

カク心得テ是ヨリツギ〳〵ノ巻共ヲバ此時代ニ引合ツ見ルベキ也。　（巻二――一二八ページ）

として、時宜相応につくり替えられていく世の道理を見ていくようにと「人」に慈円は求めたのであった。[24]

慈円の「ふたつして胸にたゝかふ夜なく道行月を見るぞうれしき」（四八〇四）との歌で仏と衆生とは平等と見なして民衆へ寄せる愛情を籠めて詠じていたわけだが、『愚管抄』皇帝年代記にも、

此詞ドモノ心ヲバ人皆是ヲシレリ。アヤシノ夫トノヰ人マデモ、此コトノハヤウナルコトグサニテ、多事ヲバ心エラルゝ也。　（巻二――一二七ページ）

傍点を付したように「愚癡無智ノ人」すなわち衆生すべてに向けて説諭していった。

後鳥羽院等の配流の事象を「ウルハシキ儀ハナシトゾ世ニ沙汰シケル也。」と寸言し、院へ討幕計画を諫止するための率直な「諫言」とは正反対の思念を投影させている。[25]『愚管抄』の文章にもアンビバレンスが看取される。

「文」と「武」――結びにかえて――

二十五歳の定家は「二見浦百首」で、

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮れ　（一三五）

との心の動きが流露している抒情を豊かな歌を詠んでいた。『源氏物語』（明石の巻）に、

はるばるとものとどこほりなき海づらなるに、なかなか、春秋の花紅葉の盛りなるよりは、ただそこはか

なう茂れる蔭どもなまめかしきに、

と描いた紫式部の文章を本説にしており、「春の花・秋の紅葉のような美しいものは何一つないことだ」と断案の激しさから寂寥感を介在させた。文治五年（一一八九）、二十八歳頃に定家が創作したとされる『松浦宮物語』には、

御門・母后ひとつ御輿に乗りたまひて、にはかに未央宮を出でたまひぬ。さすがに文武のつかさを従へて、さるべき国の宝どもは持たせたまへれど、我先にとまどひ出づる道、せむかたなきに、心よりほかにともなひそめて、逃れ出でんかたもなければ、夜とも言はず、馳せ走るよりほかのことなし。〔一八〕

とあって、燕王の反乱で王と后とが廟堂を後にした場面を描いていた。すなわち「文」の側にいる者と「武」の側にいる者とを従えて逃走したとなっている。四十三歳になり、父の俊成が元久元年（一二〇四）十一月三十日に薨去して、喪の服していた定家は翌年二月十九日に「和歌所に在りて喚び入る。此の日来、撰歌の詞を書き、切り継ぎ殊に忿がる。」と『明月記』に記載しており、和歌所に復帰して『新古今和歌集』編纂すなわち「文事」に鋭意取り組み始める。同年閏七月二十六日には、九条家に仕えている定家は慈円の甥である九条良経の許に行き、東国の情報として「時政の嫡男相模国義時、時政に背く。」とし、退出して帰路の途中で「二条大路に於て武士に逢ふ。」とあり、帰宅して休息していると「南の方に火見ゆ。御方より之を放つ云々。官軍甚だ少なし。先登の輩、多く流矢に中りて逃げ皈ると云々。京中怖畏、喩を取る物無し。」として、「武」の模様をも『明月記』に刻んだ。

『愚管抄』付録で承久元年（一二一九）六月二十五日に良経の嫡男である道家の三男の頼経が将軍継嗣となった事象をめぐって、

イマ左大臣ノ子ヲ武士ノ大将軍ニ、一定八幡大菩薩ニナサセ給ヒヌ。人ノスル事ニアラズ、一定神々ノシイダサセ給ヒヌルヨミユル、フカシギノ事ノイデキ侍リヌル也。（中略）サレバ摂籙家ト武士家トヲヒトツナシテ、文武兼行シテ世ヲマモリ、君ヲウシロミマイラスベキニナリヌルカトミユルナリ。

（巻七――三三六～三七ページ）

と揚言した。本事象は慈円の出自の九条家にとって、家運の興隆となる慶事である。傍点を付したように「文」・「武」とを象嵌した。その二年後、『愚管抄』皇帝年代記に仲恭天皇紀を布置して、

今上　三ケ月

諱懐成。承久三年辛巳四月廿日甲戌受禅。四歳。建保六年十一月廿八日立坊。一歳。十月十日寅時御誕生。

母中宮立子。土御門院太子。

摂政左大臣道家。受禅同日爲二摂政一。廿九。後京極殿良經嫡男。外祖外舅爲二大臣一之時無下不レ居二摂政一之例上、道理必然。被レ戴二宣命一云々。同廿六日爲二藤氏長者一。兵仗・勅授・一座・牛車等任レ例宣下。此日有二兵仗拝賀一。

（巻二――二三～三四ページ）

とあって、道家の姉の立子から生誕した懐成親王が即位したことを二重傍線のように「道理」として『愚管抄』を成立させた。

『明月記』治承四年（一一八〇）九月の条には「世上乱逆追討耳に満つと雖も、之を注せず。」との言辞が刻まれたわけだが、谷山茂は「私は、文学作品というものは、結局その時代や環境を無視しては成立しないという観点に立つが故に、その一歌人の作品も常にその時代色や社会相との関連において把握されねばならならぬと思う。（中略）要するに、定家の狭義の有心体と秀逸体との特殊的属性の差異は、（中略）前者は意識的故意的であり、後者は無意識的自然的であることになる。（中略）互に深く交流し、高く止揚されて、不易の一元的理念に結晶するのである。」と論じた。[26] 筆者尾崎が付した「狭義の有心体」とは定家が自己の歌論『毎月抄』で次のように説く。すなわち、狭義の場合は、創作主体の歌境への沈潜の深さが作品の立体感・深みとなって表れた歌風様式をいい、恋歌・述懐歌などの純抒情について問題にされることが多い。広義の場合は、すべての歌風様式の基礎とされるもので、作歌における観相的態度の重視に関する説明なのである。赤羽淑は「一つにはこの虚無の眼に支えられた否定精神にあるのではないかと思われる。定家の歌が物語的であるとか、虚構性をもつといわれる故由はこのネガテイブな否定の心にあるのではなかろうか。」として

それは天台止観などに説かれた浄土教の観法が練磨した想像力であり、ここに誕生した文学空間は、あたかも日想観・水想観などの観法によって幻視することができる弥陀の浄土に対応させられるのである。[27]

と指摘する。さらに、掲出した「みわたせば花ももみじもなかりけり浦のとまや苫屋の秋の夕ぐれ」の歌を例にしながら、定家の歌をめぐって、

否定表現には、王朝美への傾倒と拒否という矛盾ないし二律反背がみられるのであるが、かれの本歌取りの手法も否定を媒介とする古典の摂取であった。（中略）時間を切断面において捉えるところから生じてくる（中略）否定の限界性がかえって鋭い発見と的確な表現につながる（中略）漢詩的表現や仏教の観法との関係、また、新古今時代の他の歌人とのかかわりなどにいても触れておかねばならないような気がするが、未完のまま一応筆をおくことにする。

と赤羽は論じた。[28] 傍点を付したように定家の歌風は「否定」であるとしている。傍線の「古典の摂取」は、慈円圏で先行の『今鏡』を見据えながら「世継物語」としては破天荒な「頼朝の物語」を内実とする物語創出に参画した定家の文事と類同する。慈円は歌の修辞に則りながら、別帖の人皇初代から八十六代後堀河天皇の在位している世が時宜相応につくり替えられていく道理を叙述していった。そのように『愚管抄』を成立させていく慈円の営為を定家は弁えている。原『平家物語』の『治承物語』を摂取していった『愚管抄』と『明月記』の治承四年（一一八〇）九月に「世上乱逆追討耳に満つと雖も、之を注せず。」との言辞から、赤羽淑が定家の歌風を論じて波線を付したように「王朝美への傾倒と拒否という矛盾ないし二律反背がみられ……」とした言説は意味深長になろう。

定家は、このような側面からも慈円圏に参画して本説取りの修辞をも駆使して物語の創出に尽瘁している。

【末尾】

註

〔1〕拙稿「今様をうたう徳大寺実定の意味――屋代本『平家物語』から――」（『熊本学園大学　文学・言語学論集』第四九・五〇号・二〇一九年六月）

〔2〕「第一編　明月記自筆本の研究の慈円と定家」（『藤原定家明月記の研究』吉川弘文館・一九九七年）八五ページ・九三ページ

〔3〕日下力「定家と戦乱――文学表現の底辺を探る――」（『明月記研究』3号・一九九八年十一月）・櫻井陽子「第一部　第一篇　第一章　以仁王の乱への視線――『明月記』から『平家物語』へ――」（『平家物語の形成と受容』汲古書院・二〇〇一年）

〔4〕久保田淳「第七章　5　歌人としての定家の成長」（『藤原俊成・中世和歌の先導者』吉川弘文館・二〇二〇年）二四六～四七ページ

〔5〕村山修一「三　九条家出仕」（『藤原定家』吉川弘文館・一九六二年）四八ページ

〔6〕例えば、川合康著「六　1　頼朝の死と幕府権力の再編」（『源平の内覧と公武政権』吉川弘文館・二〇〇九年）二二一～二四ページ

〔7〕「X　頼朝の晩年」（『源頼朝』中央公論新社・二〇一九年）二六五～七ページ

〔8〕「朝廷と幕府」（『頼朝の時代』平凡社・一九九〇年）二二四～二五ページ

〔9〕「X　頼朝の晩年」（『源頼朝』中央公論新社・二〇一九年）二六四ページ

〔10〕浅見和彦「十三　終章」（『方丈記』筑摩書房・二〇一一年）二二〇ページ

〔11〕拙稿「第四章　梶原景時の頼朝救済の説話をめぐって」（『説話の形成と周縁　中近世篇』臨川書店・二〇一九年）

〔12〕五味文彦・本郷和人編「『吾妻鏡』とその特徴」（『吾妻鏡　1　頼朝の挙兵』吉川弘文館・二〇〇七年）・藪本勝治『『吾妻鏡』の合戦叙述と〈歴史〉構築』（和泉書院・二〇二二年）

〔13〕拙稿「第四章　梶原景時の頼朝救済の説話をめぐって」（『説話の形成と周縁　中近世篇』臨川書店・二〇一九年）

〔14〕久保田淳著「二　後鳥羽院とその時代　1　頼朝と和歌」（『藤原定家とその時代』岩波書店・一九九四年）一〇七ページ

〔15〕拙著「第Ⅱ部　第七章　治承物語と西山の空間」（『愚管抄の言語空間』汲古書院・二〇一四年）

〔16〕「.ix　晩年・死・のこされた課題」（『源頼朝』岩波書店・一九五八年）一八七～八八ページ

〔17〕「朝廷と幕府」（『頼朝の時代・一一八〇年代内乱史』平凡社・一九九〇年）二二四ページ

〔18〕河内祥輔は、入内計画が「もし実現したならば、おそらく朝幕の安定化に資したのではあるまいか。」との指摘がある（「朝廷と幕府」〈『頼朝の時代・一一八〇年代内乱史』〉平凡社・一九九〇年）二二四～二五ページ

〔19〕「二　後鳥羽院とその時代　1　頼朝と和歌」（『藤原定家とその時代』岩波書店・一九九四年）一二七ページ・一〇四ページ

〔20〕「二　後鳥羽院とその時代　1　頼朝と和歌」（『藤原定家とその時代』岩波書店・一九九四年）一二七ページ・一〇四ページ・拙著「第Ⅱ部　第八章　付録の文章」（『愚管抄の創成と方法』汲古書院・二〇〇四年）

〔21〕拙著「第Ⅱ部　第八章　付録の文章」（『愚管抄の創成と方法』汲古書院・二〇〇四年）

〔22〕「序章　和歌史の「中世」をめぐって」（『中世和歌史の始まり・京と鎌倉をつなぐ文化交流の軌跡』花鳥社・二〇一二年）四～二一ページ

〔23〕註〔21〕と同じ。

〔24〕註〔21〕の同書「第Ⅱ部　第九章　皇帝年代記の書き継ぎについて」

〔25〕註〔21〕の同書「第Ⅱ部　愚管抄の形成」

〔26〕「第三章　新古今の歌人」（『谷山茂著作集　新古今集とその歌人』角川書店・一九八三年）二九一ページ・三〇二ページ

〔27〕「第二章　第六節　正治・建仁期の歌境」（『藤原定家の歌風』桜楓社・一九八五年）二三七ページ

〔28〕註〔27〕の同書「第二章　第七節　否定的表現」二四七ページ・二五六～五七ページ

〔引用資料の典拠〕

『愚管抄』は『日本古典文学大系』（岩波書店）、定家の歌は『藤原定家全歌集』（筑摩書房）、慈円の歌は『拾玉集』（明治書院）、『新古今和歌集』は『日本古典文学全集』（小学館）、『明月記』は『訓読　明月記』（河出書房新社）、『吾妻鏡』は『全釋　吾妻鏡』（新人物往来社）、延慶本『平家物語』は『校訂延慶本平家物語』（汲古書院）、屋代本『平家物語』は『屋代本高野本対照・平家物語』（新典社）、『源氏物語』は『新潮日本古典集成』（新潮社）、『松浦宮物語』は『新編日本古典文学全集』（小学館）『往生要集』は『日本思想体系』（岩波書店）、『方丈記』は『新潮日本古典集成』（新潮社）。